【 中学校の部 】　優秀賞

私達を生かす大いなる力

九重町立ここのえ緑陽中学校　3年
岩下　真理華

私は緑豊かな地、九重町に生まれ育ったため、自然は自身の生活の一部として定着している。自然は私と切っても切り離せない関係にあるが、逆に言えば私にとって自然はひどく当たり前の、特別でも何でもないものだった。人生のある時点までは。

令和2年7月豪雨は、私の町にも甚大な被害を与えた。九重町では、1時間当たりの降雨量が80ミリ近くになった時があり、全壊7戸、多くの地区で断水が生じるなど大きな被害が出た。道路が寸断され私の自宅は一時孤立状態になった。近くの水力発電所は見る影もないほど崩壊し、復旧工事完成に1年以上かかった。

また、豪雨に限らず夏の異常気象や台風の回数も増えている。これは地球温暖化により空気中の水蒸気量が増えたからだと推測されている。小学校6年生の9月、私は台風のため体育館へ避難した。ウウ……と風が唸り、校庭の木がばっさばっさと揺れていた。窓越しに見ているのを忘れてしまう恐ろしさ。ヒュー、と聞こえたと思うと、風がゴウゴウと鳴った。当時の私には、自然が人間に対して怒り狂っているように見えた。ごめんなさい、ごめんなさい、と祈るように何度も呟いた。

このような経験を通して、私の心の中に「自然対人間」という構図ができあがった。人間は自然を切り拓くもので、自然はその人間を押さえつける強大な力だと考えていた。

しかし、その考えが180度変わったのは今年の5月初旬、遠足で町内の飯田高原にある一目山に登ったときだ。当時私は新年度に伴うめまぐるしい変化によって神経が過敏になっており、特に何かあったわけでもないのに気づけば目に涙を浮かべていることがよくあった。そのため、陰鬱な気分で迎えた日であったが、終わりの見えない急斜面をくたくたになりながら登り、たどり着いた頂上で、私は息を呑んだ。山頂からの展望を遮るものは何もなく、近くに涌蓋山と猟師岳が見え、久住山が星生山と扇ヶ鼻の間に見えた。その間、私は学校での鬱屈をすっかり忘れ、真に解放されていた。ただ青空を見上げながら自然の多いなる力を思い、その声に耳を傾けた。私は、俗事を超越した大きな力が自分を取り巻いていることを実感し、生きることを久し振りに喜ばしいものだと感じた。

この経験を通して考えたのは、何時ぞや心に描いたイメージ、「自然対人間」は間違っているのではないか、人間は本来自然の中で生きているのではないか、ということだ。

我々人類は自然の産物に相違ないし、食物ももとを辿れば自然によって生み出されたものだ。私たちは、自然によって生かされている。とすれば、自然と人間の共生は容易に達成されるべきものどころか、自明の真実であるべきではないか。もし人間が自然の極めて自然な秩序に逆らおうとしなければ、自然は私たちを優しく包み込み守る、憩いの場になってくれるはずだ。

私たちを生かしている自然を傷つけることは私たち自身を破壊することで、必ずどこかでその報いを受けることになってしまう。また、私が体験したような精神的な安らぎもなくてはならない。私は、自然を損なわずにバランス良く発展していく社会を至高の理想として掲げる。この理想の実現に向けて歩みを止めることなく進んでゆく人でありたい。私はこれから、自らが自然から享受する恩恵と私という存在を形作っている自然への感謝の思いを忘れずに自然豊かな故郷九重町への誇りを持ちながら生きていきたい。